研究課題　高野山伝来聖教奥書集成にむけての調査･研究－平安･鎌倉時代を中心として－

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　藤本孝一（龍谷大学文学部・客員教授）

　所内共同研究者　渡邉正男（所内担当者）・高橋慎一朗

　所外共同研究者　土居夏樹（高野山大学文学部・准教授）・野田悟（高野山大学文学部・准教授）・坂口太郎（高野山大学文学部・講師）・木下浩良（高野山大学密教文化研究所・受託研究員）・大河内智之（和歌山県立博物館・主任学芸員）・小林雄一（漢字文化研究所・研究員）

研究の概要

（１）課題の概要

　近年、日本中世史の分野では、寺院史料の重要性が強く認識されつつある。とくに、南都仏教や真言・天台宗の寺院に伝来した聖教には、仏教史・寺院史のみならず、政治史・社会史・文化史に関わる内容を持つものが多く、豊かな可能性を持つ史料群と言える。  
　本研究は、高野山の主要な子院に伝来した平安・鎌倉時代の聖教を研究対象とし、調査・検討を進めるものである。高野山の聖教は、これまで多くの調査がなされてきた。しかし、子院伝来の聖教は、さほど情報公開が進んでおらず、研究の促進に繋がっていない。聖教の内容に踏み込む以前に、基本的な奥書情報の採集・公開がなされるべき状況にある。  
　そこで、本研究では、金剛三昧院・西南院・三宝院・持明院・真別処などの子院に伝来した聖教（西南院以外の聖教は、高野山大学図書館に寄託中）の調査に取り組む。とくに、奥書類の翻刻・集成を通して、今後の研究者による聖教調査・研究の基盤を整える。

（２）研究の成果

　本年度は、新型コロナウィルス感染症の拡大によって、当初構想していた研究計画の実施については、見送らざるをえなかった。ただし、次年度の共同研究に向けて、可能な範囲で予備的な作業を行なった。具体的には、以下の２つである。  
  
①「『金剛三昧院毘張蔵聖教目録』の調査」  
　戦前に中野達慧氏（仏教学者）らが編録した当目録は、金剛三昧院聖教（高野山大学図書館に寄託中）を調査・研究する上で、羅針盤的な性格を有する。そこで、高野山大学図書館の許可を得て、その中核をなす特別部上・下２冊を通覧し、順次カード化を進めつつある。この作業を通して、金剛三昧院聖教の持つ史料的性格を把握し、次年度の調査に備えた。  
  
②古血脈の翻刻・研究  
　およそ、聖教奥書を歴史史料として活用する上では、奥書に登場する僧侶について、その基本情報（生没年、法流上における師資関係、所属寺院など）が解明されていることが望ましい。しかし、高野山の僧侶の場合、事績が不明な人物も多いため、研究を進める上で一つの障害となっている。このような問題点は、一朝一夕に解決できるものではないが、まずは未翻刻の古血脈や、その他の信頼できる史料を地道に調査・検討し、紹介することが欠かせない。  
　そこで、本年度の西南院調査の際に発見した、『保寿院流血脈私』全1巻（第73函）の翻刻・研究に取り組んだ。同血脈は、明徳４年（1393）８月から応永２年（1395）11月の間に成立したと考えられる古血脈である。撰者は明記されていないが、内的徴証から、高野山一心院の僧であった舜覚房忠禅の可能性が高い。  
　『保寿院流血脈私』の史料的価値は、高野山一心院を中心に相承された、保寿院流金玉方高野伝の師資関係について、詳細な情報を含んでいる点にある。従来、中世前期の高野伝については、その実態がほとんど不明であった。しかし、『保寿院流血脈私』と関係史料をあわせて検討すると、高野山の僧侶だけではなく、一心院で学んだ京都の権門寺院ならびに地方寺院の真言僧・律僧にも、高野伝が幅広く相承されていた史実が浮かび上がる。  
　また、一心院に属した僧侶の一部には、南朝と密接な関係を有した人物がおり、南北朝時代の高野山史を研究する上で見逃せない。とくに、『保寿院流血脈私』の撰者と考えられる忠禅は、南朝の長慶天皇から、仏舎利を下賜されるなど、格別の帰依を受けていた。『保寿院流血脈私』に類する古血脈と、関係する聖教奥書を組み合わせることで、大きな成果が期待される。